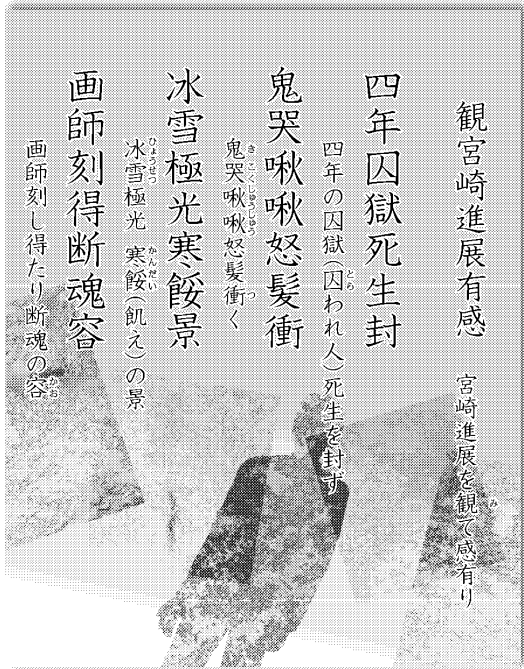


4月のある晴れた日、葉山の神奈川県立近代美術館へ出かけた。司馬光の「四月清和雨たちまち晴れ 南山戸に当たつて駈た分明なり」という詩を思わせる気持ちのいい日だった。「立ちのぼる生命 宮崎進展」を見るためだ。現在92歳の宮崎画伯は病氣療養中だが、生涯のテーマ「シベリア抑留」の絵と彫刻、オブジェの数々の作品が、静かな会場に並ぶ。20年ほど前、宮崎さんの画集作りに少し関わったことがあり、以来、その作品から目が離せなくなった。

宮崎さんは1942(昭和17)年に召集されて大陸へ渡り、終戦と同時にシベリアに抑留された。過酷な強制収容所生活のあ



観宮崎進展有感 宮崎進展を観て感有り

四年囚獄死生封

四年の囚獄(囚われ人)死生を封ず

鬼哭啾啾怒髪衝

鬼哭啾啾怒髪衝

冰雪極光寒餒景

冰雪極光 寒餒(飢え)の景

画師刻得断魂容

画師刻し得たり断魂の容

漢詩への誘い

岡崎 満義

20

《漢詩アラカルト》  
最近、女性学の論客・上野千鶴子さんから、漢詩は「歴史的賞味期限が切れたジャンル」と決めつけられ、俳人でも批評家の江里昭彦さんから「20世紀に入る頃から急速に衰えていって、今ではさしたる価値はない」と断言された(「アナホリッシュ文学」第5号の座談会から)。しかし神奈川漢詩連盟では会員2の作品集「神奈川清韻」第2集を発行。3年前の第1集より約20首多い103首が集まった。鳥の目で見れば漢詩はゼロに等しいだろうが、虫の目でみれば「どっこい生きてる」のだ。

と、49年に帰国した。抑留された日本人は一説には約65万人。極寒、飢餓、重労働の三重苦の中で、6万人余りが死亡したといわれる。日本民族として、あまりにつらい外国異文化体験である。

画家として宮崎さんにも容易に扱いかねる重い体験だったに違いない。噴出するように作品化され始めたのは、長い時間を経た平成になつてからだ。

その作品の前に立つと、きれいに描かれた絵ではなく、ドンゴロス(粗い麻布)を貼り、重ね、絵の具を塗りつけた荒々しい作風だ。まるで剥き出しの魂がゴロンと投げ出されていて、見る者の魂に激しく呼びかけてくるようだ。目で見るというより、五臓六腑で感じる。無一物中無尺蔵、裸の魂の豊かさでも言おうか。

今、憲法第9条が揺らいでいる。尖閣諸島、北方領土、従軍慰安婦、はてはウクライナの民族問題。それは単なる政治問題ではない。生命の根っこから考えよ、と宮崎作品は呼びかけているような気がする。

(神奈川漢詩連盟会長)

第1日曜日に掲載します。